



技と心が作り出す
鯉のぼり

桜の花がほころび始める春。南アルプス市の井上染物店では、端午の節句に向けて鯉のぼりや武者のぼりの制作がピークを迎えます。昔ながらの作業場では、七代目の井上展弘さんが細やかなはけ使いで勇壮な武者を色鮮やかに染めていきます。

富士川舟運が開かれ、南アルプス市周辺が駿河と信州を結ぶ駿信往還の要として栄えた江戸時代の末期に創業した井上染物店は、160年以上にわたり、染物技術を守り続けている老舗です。伝統の技法で仕上げる鯉のぼりと甲州武者のぼりは、平成6年に県郷土伝統工芸品に認定されました。現在は展弘さんがその技法を受け継いでいます。

展弘さんが染物の道に入り、今年で10年目。「やればやるほど難しさや奥深さを感じます。だからこそ面白く、もっと腕を上げたいと思います、日々精進しています」と瞳を輝かせます。



真剣な表情で鯉のぼりのうろこ部分に糊置きをする展弘さん

伝統の技に思いを込めて

井上染物店七代目 のぶひろ 井上展弘さん



伝統の技で染めた色鮮やかな鯉のぼりを手に。後ろは川中島の合戦を描いたのれん



▲20年余り前までは釜無川で糊を落とす水洗いをしていた。川を泳ぐ鯉のぼりの姿は、早春の風物詩だった

◀江戸はけを使って色を付けていく「染付」の作業。ぼかしの美しさは井上染物店ならではの

染めの作業は「糊作り」から始まり、「下絵写し」や「染付」など10の工程があります。中でも難しいとされるのが、和紙の筒から糊を絞り出して絵柄の輪郭を描く「糊置き」です。

「仕上がりの色合いを左右する大事な工程です。技はもちろんです。が、気持ちも大切です。とても集中力が必要な作業ですが、一番楽しい時なんです」と展弘さん。

何十年も大切にしている
「のぼり」を
もらえる

最近ではナイロン生地プリントして作られた鯉のぼりが主流ですが、独特の色の鮮やかさや風合いは、染め付けされた木綿布の鯉のぼりならではの。

「古くなくても味があり、代々引き継げるのが伝統的な染物の良さ。染物は同じように作っても、すべて異なります。一点一点がその人のためだけに染めているものなんです」

「最近では地域の人から『うちの鯉のぼりはお前のじいちゃんが染めてくれたものだよ』などと声を掛けられます」

「先代たちが染めたものが今も大切にされているのは本当にうれしいですね。自分も何十年も大切にしていきたいと思います。その言葉からは、江戸時代から続く伝統の技と心を受け継いだ展弘さんの熱い思いを感じることができました。」